

1. 緒言

近年、気象変動の影響により、豪雨災害や線状降水帯の頻発は顕著である。水災害は激甚化が進み、洪水や浸水による死者・行方不明者は増加している。例えば、2009年に兵庫県佐用町で発生した豪雨災害では、住民が避難所に向かう途中で濁流に巻き込まれ、多くの犠牲者を出した。この災害は避難行動のあり方を見直す契機となったが、2020年代に入っても類似する水災害での被害は続いており、水害のさらなる激甚化は懸念されている。その中で、現行の水防災に関する教育では、陸上避難・ハザードマップの活用・タイムラインの作成などに主眼が置かれているが、洪水時の生存を想定した実践的なスキル教育の充実が課題と考える。そこで本発表では、洪水時の対応として、第一に水災害対応としての「ういてまで」および「シンういてまで」の実用化と可能性、第二にこの2つの技能を活用した実技（避難行動）に関する提案、第三に2つの技能の習得により期待される効果に関して考察する。

2. 水災害対応としての「ういてまで」および「シンういてまで」の実用化と可能性

「ういてまで」は、背浮きで呼吸を確保し救助を待つ技術で、年齢を問わず習得しやすいことから、実用性の高い水災害時のサバイバル技術と考える。

一方、「シンういてまで」は、救命胴衣や身近な浮力体（リュック、衣類等）を保持しながら浮く姿勢を保つ自助的な生存技術と考える。これは、浸水時の屋内や車内の閉じ込め状況での安全確保や、海辺や河川流域での水防災に関する教育等、様々な場面での活用が期待される。

3. 「ういてまで」および「シンういてまで」を活用した実技（避難行動）に関する提案

① 逃げ遅れ時の選択肢としての技術

洪水時水平および垂直避難が困難な状況の個人及び地域は、「浮いて待つ」考え方や方法を選択することも重要と考える。そのため、日頃から地域のハザードマップ等の情報を活用して「逃げ遅れリスク」が高いと確認した地域では、2つの技術の普及および習得が不可欠と考えられる。

② 家庭・地域の備え

浮く技術の習得や身の周りの浮力体の準備（ペットボトル、リュック等）とその使用方法を、学校の授業や一般を対象とした講習会での受講者等の特性を考慮し、授業や地域の防災訓練等で実践的に模擬体験を行うことなどから、水災害発生時のサバイバル対応力が高まることが期待される。

③ 自助力の強化

子どもだけでなく高齢者にも有効と考える、自助力を高める水防災教育の柱となりうる。

4. 「ういてまで」および「シンういてまで」の技能習得により、期待される効果

- ① 生存率の向上 : 洪水時に流されたとしても、命をつなぐ可能性が高まる。
- ② パニックの抑制 : 浮いて（呼吸を確保して）待つことで、落ち着きを保ちやすくなる。
- ③ 救助の迅速化 : 要救助者が水面に浮いていることで、発見されやすくなる。
- ④ 「地域防災力」向上への期待 : 年齢を問わず誰もが参加できる「命を守る訓練」として有用である。

5. まとめ

「ういてまで」および「シンういてまで」は、たとえ逃げ遅れても「終わりではなく、次がある」と、要救助者に「希望」を与える技術と考える。今後、激甚化が予想される水災害において「避難できる人」のためだけでなく、「避難できない人の命を守る技術」として、「ういてまで」および「シンういてまで」は、今後の学校や地域の水防災教育として、非常に重要な役割を担うと考えられる。